寄せ太鼓

北九州市立長崎街道
木屋瀬宿記念館
運営協議会広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬
三丁目16番26号(〒807-1261)
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

遊びにおいでよ！ひなまつりイベント ■好評開催中■

現在みちの郷土史料館企画展示室では、「長崎街道ひなまつり木屋瀬宿～立場茶屋銀杏屋」（平成27年2月22日(日)～3月29日(日)）を開催しております。昨年の第53回企画展に引き続き、石坂の立場茶屋銀杏屋（3月22日(日)まで）と木屋瀬のもやいの家（3月31日(火)まで）、旧高崎家住宅【伊馬春部生家】（3月29日(日)まで）、木屋瀬宿記念館（3月29日(日)まで）の4施設連携してひなまつり企画を行っています。それぞれの施設で趣を変えて、古式の雛飾りやさげもん等の展示を行い、また3月1日(日)～3月3日(火)の間、「立場茶屋銀杏屋」と「もやいの家」では甘酒などの振る舞いも行っておりますので、この機会にぜひお越しください。

総合問い合わせ先
長崎街道
木屋瀬宿記念館
☎ 093 619・1149

真☆剣☆勝☆負 第14回 木屋頼いろは歌留多大会

正月恒例の「木屋瀬いろは歌留多大会」も回を重ね今年は14回目となり、総勢105名の方に参加していただきました。子どもの部と一般の部（中学生以上）に分かれ、トーナメント方式で行いました。会場は熱中する子どもたちの熱気に溢れ、こやのせ座運営部会ボランティアの用意したぜんざいの接待に皆さん喜んでいただけたようです。

木屋瀬ならではの文化や歴史が織り込まれた【岩井屋不彫さんの木屋瀬いろは歌留多】今回紹介するのは【と】。

○と　泊まれ　泊まれ　旅の客

浄土真宗西本願寺派・白髪山・西元寺の山門から連なる白漆喰塗りの築地塀は昔から祇園町通りの風物でございます。

入賞者

子どもの部（参加者26名）

・優勝　宝田　美陽（木屋瀬小学校6年生）
・準優勝　松岡　宏武（木屋瀬小学校4年生）
・第3位　松岡　芳知（木屋瀬小学校1年生）
・第3位　宮地　神菜（木屋瀬小学校6年生）

一般の部（参加者80名）

・優勝　松岡　沙知（木屋瀬中学校）
・準優勝　田吹　修人（木屋瀬中学校）
・第3位　楳田　航生（木屋瀬中学校）
・第3位　田中　萌衣（木屋瀬中学校）

全町恵毘須お座

宿駅往時より商売繁盛の神として崇拝されだ、恵毘須さま。

町内毎に恵毘須お座が繰り広げられていましたが、現在では木屋瀬全町挙げての祭典として実施しています。

古より12月3日早朝に行われていましたが、平成22年より宵恵毘須に変更されました。神事やお座で頂くお神酒は付き物（飲酒運転防止）で、一番座を午後6時から、二番座午後7時、三番座午後8時の3回に分けて実施しています。各お座45名～55名の参加で、須賀神社参籠殿は、ほぼ満席になり、昨年は140名の皆様にご参加頂きました。

お座は一番拍手から始まり、ご神酒拝戴、福引などを行い三番拍手で締めとなります。境内では木屋瀬商工連盟主催の恵毘須協賛謝恩セールと銘打ち福引抽選会を実施しています。特賞として、新春の三社参り（一泊二日）の旅を15名ご招待しています。その他特別賞として商連加盟の各店より賞品を出品して頂き、消費者の皆様に喜んで頂けるよう工夫をしています。

全町お座の開催に際し、町内会長さま氏子総代会の方々をはじめ多くの方にご協力を賜りました事心より感謝しお礼申し上げます。

木屋瀬商工連盟会長　山田　靖

■講座"木屋瀬　時代の散歩道"報告

平成26年9月19日(金)～10月24日(金)に行われた講座"木屋瀬　時代の散歩道"も、今回で12年目となりました。全6回の講座を開催し、木屋瀬に関するテーマを中心とした講義や、木屋瀬をはじめ長崎県の長崎街道日見宿、長崎の見学を実施しました。今年の参加者は43名と多くの方が熱心に受講してくださいました。ありがとうございました。

木屋瀬宿の川艜文書 ③遠賀川の川艜と船頭

木屋瀬みちの郷土史料保存会　松尾　良美

前号では、遠賀川を往来する川艜を長い竿で漕ぐ、度胸と男気を張った船頭衆の中で、「筑豊の炭鉱王」と称された昨年のNHKの朝ドラマ「花子とアン」に登場した伊藤伝右衛門翁の事を書いた。

今回は、昭和三十年代に西日本新聞に掲載された「川船頭座談会」と木屋瀬町誌や中間唐戸築造二百五十周年記念事業誌「堀川と折尾」の記事を資料として、木屋瀬出身で若き頃船頭であった筑後屋石橋応助と初代九州山（青山十郎）について話を進めたい。

筑後屋応助の生家は、宿場時代に本陣前に通称"八軒屋"と呼ばれていた旅籠等の稼業を営む商家の一軒であった。応助の店は明治に入ると旅籠を廃業し、彼は当時に流行していた人力車を扱ったり、川艜で石炭の運送が盛んな船頭であった。やがて日露戦争が勃発し、彼が出征して目覚ましい活躍した事が、町誌や座談会と記念誌に記述されている。

「日露戦争で鴨緑江を一番で渡った筑後屋応助が一等卒やったのがいきなり二階級特進で伍長になっチ、金鵄勲章功六級を貰いましたが、皆ンなタマがりましたバイ。ありゃ、やっぱあ船頭をしよったおかげでござっしょうナシ。」

町の小学校の卒業式、町長を始めおえら方がズラリ居並ぶ来賓席に、毎年必ず一人の風彩のあがらない老人が列席している。川艜船頭を引退して人力車や飲食店の稼業を営んでいる石橋応助という老人である。なぜ、彼がそんな場ちがいな所に居るのだろうか。それは、彼の胸元を見てもらえばわかる。金鵄勲章がサン然と輝いているのだ。

彼の兵役時代、応助青年も勇躍戦線へ赴き、鴨緑江の渡河作戦に参戦した。朝鮮と中国との国境に流れる大河の突破は、戦略上重要で大変は激戦であったが、彼は見事にこの大河を泳ぎ渡り、名誉ある一番渡りを果たし一躍勇名を馳せたのである。応助は二階級特進・金鵄勲章が授与され、川筋の船頭仲間を大いに沸かしたのである。応助さんは昭和十五年に六十四才で病卒、その勲功に因んで戒名は「顕功院正応居士」である。

大関九州山青山十郎は、楠橋で生まれて明治四十一年に木屋瀬の中西家に入婿。鉄道が開通して約二十年を経ていたが、まだ遠賀川には石炭を運搬する川艜がひしめきあっていた。船頭の十郎は米俵とセメント樽を両手に軽々と運ぶ力持ちで、竿一本で巧みに船を操つり、川風、潮風にさらされ赤銅色に日焼けして見るからには、背丈百七十四糎、体重百二十四キロ（約三十三貫）の逞しい、船頭衆の中にあってもひときわ目立つ大男であった。

この若者、体がでっかいだけあって豪力無双、幾艘の川艜を一人で引っ張り寄せる程であった。喧嘩もめっぽう強く、その上斗酒をも辞さない大酒飲みで船頭仲間の間で大変な人気者であった。

或る日の事、この十郎さん、ちょいと一杯ひっかけるつもりで堀川端に船を繋ぎ、飲み屋の暖簾をくぐったが、三度の飯より酒が好き底なしの大酒呑みときている。一杯や二杯はほんの口よごし、それでおさまらない。大きな湯呑みでグイグイ飲み始めたまではよかったが、その内に些細な事から威勢のいい喧嘩がはじまった。"船頭の酒盛は喧嘩がでなければ幕が引けない"と言われたのがその通りになった。喜んだのは野次馬で、もうそろそろ始まってよい頃……と心中ひそかに期待していた連中ばかりである。見る間に人だかりになって、おっとり刀で巡査が駆けつけて来た。当時の巡査は武芸の心得は多少あったが、十郎さんにかかってはまるで子ども あつかい。取っては投げ、掴んでは投げ獅子奮迅の大暴れであって、巡査達は満々と水をたたえた堀川へドブン……。ずぶ濡れではい上がった巡査はあきれ顔で、「お前のような強いヤツは見た事がない船頭をやめて相撲取りになれ」と言ったそうだ。

ところが面白い事に十郎さん、巡査の勧めた通りに船頭をやめて、出羽海部屋に入門した。明治四十四年で彼二十才の時である。年令的には遅い入門であるが、持前の豪力と肩巾の広い堅太りの体格で、左を差して一気に寄り切る取口で、めきめき頭角をあらわし大正七年には到頭大関に昇進した。しかし郷土の期待を一身に集めたもの、日頃の大酒飲みで内臓をこわし大関の座も二場所で明け渡たし、大正十五年五月場所であっさり引退してしまった。引退を伝え聞いた船頭衆、残念がると思いきや「やっぱい川筋もんはいさぎいいバイ、男らしか」妙なところに感心したという。

十郎さんこと九州山が郷里の木屋瀬に錦を飾ったのは、大正六年に扇天満宮裏で盛大な地方巡業相撲興行が行われた折ではなかろうか。

シリーズ 筑前木屋瀬宿 神仏めぐり

第三十三回 須賀神社
—末松宮司を訪ねて(その二)—

今年西暦二〇一五年は、六十年に一度の乙未(きのとひつじ)の年です。昨年は自然災害が多かったので、今年は、羊のように優しい年であってほしいと願っています。さて、須賀神社では、四季を通して、お祭りがあります。

「祭り」は、大別すると、「大祭」「祭」「中祭」「小祭」に区分されています。「大祭」としては、元旦祭、春季大祭、祇園祭礼、秋季大祭、等です。又「中祭」は、六月十二月に執り行う「大祓祭」。又、各町内の「おこもり」や「どんど焼き」その他、喜寿　四十四賀や、お宮参り等、個人の祈願を、「小祭」と言います。

「祭り」は、神殿で神職が中心となり、身を清め神饌(しんせん)を用意し、祝詞を唱え、玉串を奉り、神饌(お供え物)のお下がりをいただく直会(なおらい)の儀式を執り行います。

御神輿の巡幸や山笠の引き回し、相撲大会等の境内行事も、「祭り」の一部です。相撲は元来重要な神事の一つです。「日本書記」に、「のみのすくね」と「たいまのはやと」が力くらべをしたとの記述があり、それが相撲の起源とされています。その後、稲の収穫期に神に感謝をこめて奉納相撲が行われ、現在につながっているのです。現在大相撲の力士が土俵入りのとき、打つ柏手や横綱のまわしに巻かれた注連縄も、又土俵に撒かれる塩も祭礼の意味を持っています。さて、今年も一月一日、須賀神社では、歳旦祭が行われました。歳晩には、大祓が行われ、一年間知らず知らずの内に、犯してきた過ち、罪穢れを払い清め、清く正しい心身に立ち返り元旦を迎えるのです。歳旦祭は、新しい年神様を迎え神々に感謝を捧げ一年の無事を祈る儀式です。

宮中にても、天皇が皇統の繁栄と五穀豊穣と国民の加護を祈念する祭りが執り行われます。須賀神社では正月が過ぎますと、「どんど」の由来は、青竹を焼くことで大きな音がするので、「どんど」と名がついたようです。地方によっては、左義長と呼び、小正月に行うところもあります。長い竹を櫓に組んで、しめ飾りや門松や書き初めなど持ち寄って焼く祭事です。年神様を迎えた品々を焼いて見送る儀式とも言われています。また、名前の須賀神社では春になると、その年の豊作を祈っての春祭り、夏には、厄病退治の祇園祭や夏越の祭り、秋には収穫を感謝しての秋祭りが執り行われます。日本人は自然の中に神が有りと信じ、自然を崇拝し感謝し生活してきました ので、日々の生活、生き方、物の見方、考え方に、神道は深く根ざしています。

八方にどんどの櫓崩しけり
元朝や国旗を掲ぐ宿場町

本町　野口靖彦

第22回 筑前木屋瀬宿場まつり報告

「歴史と文化を活かした地域の活性化」の目的で始められ、22回を迎えた26年度「筑前木屋瀬宿場まつり」は前日からの雨で街道での催しが心配されましたが、開会式の頃から天候は回復し、全プログラムが滞りなく執り行われた事をご報告申し上げます。

これも偏に、22年間の長きに亘りご支援・ご協力戴いています、皆様の目的に対する「熱き心」の賜であると厚くお礼申し上げます。

「木屋瀬宿場まつり」は、木屋瀬皆様の共有文化財産である「宿場踊り」を中心に、筑前各地の「伝承盆踊りの祭典」へと発展してきました。このようなお祭りは他にない地域イベントとして高く評価されていることは皆様ご存知のことと思います。反面地元での「まつり」に対する盛り上がりに欠ける面があり、実行委員会特に企画部会の大きな課題でありました。ここ数年この課題解決に取り組んで参りましたので、これをご報告いたします。

①企画委員会の改善

祭りの計画は企画部会だけでなく、企画部会・運営部会・広報部会・会計で行ない、多様な意見と活発な議論が行なえるようにしました。

②集中するお客様の分散化

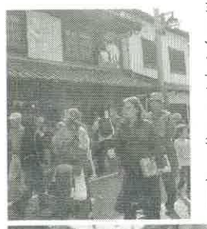
街道全体を利用した祭りでありますが中央部(記念館周辺)にお客が集中し両構口に近づくほど閑散としている状態でありました。街道全体にお客さんを分散する方策に多くの時間と議論を重ね ●街道の伝承盆踊り会場(A・B会場)を中央部(記念館)近くに移動する ●中央部(記念館)付近に集中している出店を伝承盆踊り会場より外側に出店する ●フリーマーケット会場を3丁目広場から街道に分散する ●町並み史料館をスタンプラリー・ポイントにする　以上を実施したことにより人の流れが大幅に変化いたしました。

③新たな事業の展開

企画の段階で数年間断念していた「宿場祭り」での「筑前植木大名行列」の実施方法を植木行列保存会と話し合い、負担の少ない植木の祭りの年(4年毎)に行なう事として昨年21回宿場祭りで実施いたしました。残念ながら当日は天候に恵まれず雨の中での行列でしたが大変好評であり、好天の下で今一度計画したいものです。

また近年、実行委員会に対し「こやのせ座という立派な施設をもっと利用したら」とのご意見がありこれに答えるべく、今年こやのせ座に於いて木屋瀬市民センターのクラブ4グループに発表会をして頂きました。出演したクラブ・お客様からも好評であり継続する事業になるよう望みます。

私事ですが、企画を担当させて頂き4年、今回で引退させて戴くこととなりました。皆様のご理解とご協力で、多くのことを企画実行させて戴くことができまた多くの事を勉強させて戴きました。本当にありがとうございました。



文化発信の寄せ太鼓。こやのせ座発、全国行き。ホームページ http://www.city.kitakyushu.lg.jp/shisetsu/menu06_0005.html

子どもえびす「頭」

12月6日、7日須賀神社にて5名の児童により平成26年度子供恵比須頭が行われました。この祭りは、木屋瀬に江戸時代から伝わる由緒ある行事で、男子が数え11歳(現在の4年生)になりますと地域の若衆の仲間入りをする儀式として執り行われたものです。

昔は、男の子もこの年頃になりますと奉公に出たりして、子ども時代に別れを告げる習慣があり、この期を境に大人の仲間に入る事になります。武士社会では元服として祝福したそうです。現在は、毎年12月の第一、土曜日と日曜日の2日間に渡って行なわれ、頭になった子供の名前が披露された紅白の幕を笹山笠に張り町内を練りまわります。

笹山笠の巡行の他には、須賀神社に伝わる社宝を持って御神幸行列で町内を廻ります。本年も天候に恵まれ子供たちも元気一杯に楽しんでいました。

この木屋瀬で育った子供たちが一生一度の祝事であるこの行事を経験したことで木屋瀬の伝統文化に関心を持ち、大人になっても忘れられない故郷の思い出として残るものだと私は思います。

最後になりますが、この行事の準備から本番まで御協力頂きました皆様方、また ご芳志をくださいました皆様方に平成26年度子ども恵比須頭関係者を代表して心よりお礼を申し上げます。

世話人代表　宝田　治

木屋瀬と夷講(後編)

戸主の恵毘須

町内毎に行われます、五戸又は六戸で順番にて当元をつめます。十年に一度位です。当元の内より御座を開く座元を定めます。座元の家の門に、笹をたて、七五三を張り、御手水や御手拭を備えます。御座を開く間の正面に恵毘須様を祭ります。

祭の前夜、当元は紋付羽織袴に、馬来提灯をさげて、明日の御座の案内に巡ります。案内は、必ず戸主が出て御受けします。祭りの朝、当元が打つ一番太鼓にて、御客は参拝の支度をします。年輩者に白扇紋付羽織袴姿も見られます。お宮に詣で、御座元にゆきます。

この頃おい、町内毎の御座の太鼓が、遠近に鳴りわたります。二番太鼓にて、まだ明けやらぬ早朝、御座が開かれます。御座の進行は、当元の代表が、亭主と呼ばれ紋付羽織袴に白扇を持ち、下座に控えこれに当たりますが、総てお客の代表に御伺いをたて、許しを得なければなりません。亭主の挨拶にて御座が始まりますと、御神前の御供や膳部の献立の検査があります。

これは、町内会長と古老二三人立会って、古くから伝えられている献立書き送り帳と照合するのです。万一不出来であった時は、何やかやと御座の進行に手間取ります。御神酒が一巡して、一番手を入れ、御神号、鏡餅、御神酒、末広等の抽籤が終り、二番手を入れます。これまでかなりの時間を要しますが、御客は正座していなければなりません。燗酒が出され酒宴となり、客も自由になれ女中の出入も出来ます。福引等もまじり酒宴も盛んになりますが、三番手を入れると同時に、御座も酒宴も終ります。

当渡し

御神号、八ツ足、献立書き送り帳、春慶塗高足膳、輪島塗蓋付食器等(町内所有物)、こうした御座に使用したものを、湯通しその他のあと仕舞を完全にすませ、来年度の当元と立会いの上、員数改め受渡しを終り、当元としての総てを終します。

わたしの昔話

御供と膳部

活鮒、掛鯛、鏡餅、御神酒、栄螺、一献付魚、凍り大根、柚膾、小豆飯、汁物等があります。

活鮒(イカシフナ)

器に鮒を活かし、神前に供え、祭りが終りて川に放ちます。

掛鯛(カケダイ)

稲穂は、男稲女稲の二本を用います。男稲は穂が茎より交互に出ている、女稲は穂が茎の同じ所より左右正反対に二本出ています。

栄螺(サザエ)

おす、めすを一組として配します。

汁物

豆腐は、賽の目に切り。青味は人参菜を用いる。

凍(コゴ)り大根

大根は、直径八糎以上の太いものを選びます。これを五糎位の厚さに輪切りします。大根葉はよく洗い長いまま鍋の底に敷きます。この上に輪切りした大根を入れ、鮒を洗い上げただけの姿のまま入れます。調味料を加え、お酒も入れます。初めは強火、のちとろ火にて七～八時間以上煮続けます。大根は濃飴色となり、半分近くに小さくなります。一夜置いて凍らせます。

注…歯に沁みるほどに凍った大根も大根葉も、これこそふるさとの味、木屋瀬恵毘須の味と自慢しているものです。

一献付魚

海腹川背(ウミハラカワセ)と呼ばれ、海の魚は腹を神の方に向け、川の魚は背を神の方に向けます。海と川の魚を左右に配する時は、魚の頭と頭とがつき合うように配します。

木屋瀬の人びとは、海腹川背の神事を非常に縁起の良い事とし産腹交せとお受けして、お産がすみますと、床の向きをかえます。例えば、お産のため南枕に寝ていて、無事お産を終えますと、褥を一切取り替えて東枕に寝交わすといった習わしです。海腹川背の信仰を産腹交せと生活に御受けし、神々にその喜びを告げ、神に大きく感謝する、古き良き習慣が、今も尚、一部に守り継がれています。

本町　柴田由美子

柴田豊廣遺稿集より

こやのせ　New Yearコンサート

木屋瀬宿記念館では平成27年1月18日(日)、響ホール室内合奏団の方をお迎えしてコンサートを行いました。わかりやすく、楽しい説明と共にモーツァルトなどのクラシックの名曲等を演奏してくださいました。また、今回は合唱団の方4名も加わり、「ふるさと」や日本の四季を歌った「春の小川」、「紅葉」等を来場者の皆様と一緒に歌っていただき、会場と一体になって盛り上げてくださいました。来場者は約150名と大勢の方にお越しいただきました。誠にありがとうございました。

宿場町木屋瀬。伝統を受け継ぎ、次世代を育む長崎街道木屋瀬宿記念館。